映画とは違うトーベ。偉大な母とシリアスなムーミン

眞鍋由比

今年「TOVEトーベ」という小粋なフィンランド映画が公開された。トーベ・ヤンソンの自伝的映画で、彼女が芸術家として迷いながらムーミンという人気作を世に送り出していく過程を見ることができる。戦争が終わって荒廃した世の中で、雑誌やパーティの招待状のイラストを描いたりして糊口をしのぐ若い画家トーベ。厳格な父は彫刻家で、トーベの絵なんか芸術として認めていない。優しい母。そして運命の恋。演出家としても活躍している女性とトーベは激しい恋に堕ちる。同性愛が犯罪とされている時代ではなかなか公にできない恋。同時にスナフキンのモデルとされる優しい男性政治家との交流も描かれる。生きていくうえで単純に人を好きになってお互いを想って離れて…という営みを同性愛であれ、不倫であれ自然に描いているところに好感がもてた。ムーミンが着ぐるみで舞台化されていたのには少々驚いたが。

今回紹介する本は『**トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界**』冨原眞弓著　2009青土社。フィンランドの政治風刺誌ガルムの看板画家だったトーヴェとその母シグネの活躍を戦時中をメインに解説。映画「トーベ」と違うのは母シグネはお金を稼げない夫の替わりにイラストでお金を稼いで家族を養い、夫の彫刻の助手もつとめ、家事育児もすべてこなすスーパーウーマンだったということ。シグネの作品が風刺画としてかなり力強く鋭いものだったので男と思っていた人も多かった。シグネが女性と知って「じゃ、ギャラは半額でいいな」といわれて憤慨しその編集者の仕事を断ったりしたこともある。

トーベ自身も優秀だったが、アカデミーで首席をとったのに彼女の作品は目立たないところに掲示されて、同級生の男の作品を目立つところに配置され、女性であることで差別を受け、その学校を辞めてしまった。

シグネは才能豊かで切手や紙幣、本の装丁のデザインも請け負っていて、彼女のデザインが同時に本屋の店先を席巻することもあった。同時期に出版されるものにはタッチを変えて調整する器用さもあった。

政治への風刺を載せるカリカチュア誌が、物資の窮乏を極める戦時中に発刊し続けられていただけですごいが、それにずっとシグネやトーヴェがレベルの高い絵を載せていたことが奇跡のようだ。だから映画でも触れられていたようにトーヴェのヒトラーへの皮肉などは自然に醸成されていったものなのだろう。

叔父の家に下宿していたときのジョークからムーミントロールが生まれた。初期のムーミンは難しい顔をしている（戦時中だからしかたない？）。チョコレートの宣伝もしているし、ヒトラーをおちょくる絵にも登場している。

ドイツよりもロシアが憎いというのは同時代のスウェーデンのリンドグレーンの日記にもでてくるが、中立のスウェーデンよりも戦時中のフィンランドは特に両国に挟まれて苦労していた様がトーヴェの絵からよくわかる。

苦しいときほど勇気を持って笑い飛ばせるユーモアが必要…この本は当時の社会情勢を詳しく解説してくれているので風刺画の意味がよくわかってとても面白かった。戦時中の生活の苦しさも。

母が死んでから世界旅行に出たトーベは二度とイラストも児童文学も書かず、大人向けの小説のみ執筆した。彼女の中で何かが終わったのだろう。